（2023年７月29日発行）

W.A.Mozart Hiroba

「モォツァルト広場」 SINCE 1995

第49号

音楽に救われる人生を想う

モーツァルトへの手紙（その24）

会員番号　K.618　**加　藤　　明**

1791年の６月にモーツァルトはウィーンから30キロほど離れた温泉地バーデンで湯治療養中の妻コンスタンツェを見舞う。そのバーデンの教会合唱指揮者、アントン・シュトルのために創られたモテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」、その奇跡的なまでの「祈りの透明感」を思う。

小生は休日を利用して、20キロほど離れた「あきたのバーデン」,《貝の沢温泉》で心の湯治をしている。そして、いつもバーデンのモーツァルトがお風呂に入って、湧き出る旋律を鼻歌で奏する光景を想像しては、ニヤリとするのだ（変な習慣）。

「あきたのバーデン」につかっているといつも天国の玄関口に立っている気分になるのだが、余命半年の我がモーツァルトもバーデンの湯治場で天国の入口を意識した瞬間があったものだろうか・・。今回の拙稿は早朝の「あきたのバーデン」で想を得て書き出した。

モーツァルトよ、今回はあなたの比較的地味な小品をテーマ曲にして、思いつくまま記述することにします。

テーマ曲として選択したのはピアノ連弾の小品で、今日ではめったにナマで聴く機会がない地味な作品ですが、あなたらしさに溢れた名曲として小生の中では長く、しっかり息づいているノスタルジックな一曲です（k番号は501）。

ここで「あなたらしさ」と言うのは、一つに、リズムが極めてシンプルで耳に優しくチャーミング、二つ目は、気品あふれる旋律の豊かさと冴えわたる変奏の妙、そして三つ目は、これら二つの要素を連弾のピアノが見事に支えあう形式、という特性からと思われます。

あなたがこの曲を創作した当時はすでにウィーンでの演奏活動に陰りが見え始め、三男が誕生するも二週間ほどで亡くなる、という悲劇に見舞われていたころでした（間もなく、「ドン・ジョバンニ」初演のプラハからお声がかかりますが・・）。

しかし、どんな逆境にもめげずに敢然と現実を受け止める自由人モーツァルトがこの一曲にも反映され、凝縮されているように感じられるのです。

そう、この曲を正面から受け止めて、「虚を突かれた」という思いを懐かれたモーツァルトの信奉者は少なくないと思われますがどうでしょう？

そんなあなたの隠れた名作をアルゲリッチとコヴァセヴッチという録音当時深いおつきあいをしていた名ピアニスト二人の、ほぼ45年前の

記念碑的な録音（CD）で聴いています。ここには音楽を奏する喜びと愉しさが横溢しています！

（この盤の《アンダンテと５つの変奏曲》ほどに、モーツァルトの特性を豊かに再現している演奏は他に類をみないほどで、他にバルトークとドビュッシーの傑作も収録されている）

◆

その日は故あって、どうしてもあなたの絶筆となった《レクイエム》を流しながら、いつもの通勤ドライブをスタートさせなければなりませんでした。

それまでも時々、古楽器演奏で著名なクイケンが指揮するライブ盤を聴きながら走っておりましたが、その日もこの古い名盤をピックアップしました。

「キリエ」から「ラクリモサ」までは途中のコンビニで一休みしながら、じっくり追いかけるように（たぶん目を閉じて）聴いたことを憶えています。

《レクイエム》に向き合わなければ治まらなかった理由は、たぶん、その一昨日に40年にも及ぶつきあいをさせてもらった友人《ハラさん》が突然亡くなられた、とのご子息の電話で慌ててご自宅に安置されている友人の棺に手を合わせる、という予想だにしない事態に出くわしたからでした。

長く秋田県の喫茶店業界でリーダーとして活躍された《ハラさん》（「和蘭豆」という山王の老舗を営んでいました）とは「秋田県喫茶業環境衛生同業組合」という組織で共にイベント活動などで愉しんだ間柄でした。

《ハラさん》は常に潾とした姿勢とゆったりとした口調の低音ボイス、そして大きくて穏やかな眼差しが魅力的な紳士でした。

最近は殆どお会いする機会もなかったのですが、昨年の秋に彼がファミリーのみなさんと一緒にひょっこり「道の駅五城目」に来られ、現況の立ち話をしてお別れしたのが彼との永の別れとなってしまいました。

さて、過酷な現実と言わねばなりません。

実は、そんな《ハラさん》の弔いを終えた当日のお昼前には、「モォツァルト広場」で長らく幹事として参画されてきた《団長》こと畠山久雄さんが危篤状態となり、奥さんからの連絡によりホスピスの施設にお見舞いに行ったばかりでした。

呼んでも、叫んでも反応のない《団長》に（長く秋田市管弦楽団の団長をされていたことからの呼び名）、せめて苦しまないで雲の上に行ってくれるように、念じ、祈る、それしか出来ることがありませんでした。

そして、その二日後の朝、車での通勤途中に奥さんから、ついに《団長》の訃報が届きました。

「やはり逝っちゃったか・・・」（また置き去りにされてしまった・・）。

覚悟は出来ていたのですが、その訃報を聞いた途端、思いがけず何かがプッツリと弾け、独り車のなかで号泣してしまいました。

《団長》とは設立間もない「広場」がサマーコンサートを初めて企画するあたりから今日ま

で、フルート奏者としてはもとより、運営上の相談役、幹事の一人として長年お世話になってきました。

月一回の「幹事会」ではにこやかな表情を絶やさず、反面、淡々かつ冷静な姿勢で自らの考えを滔々と述べたり、また時には下ネタや過激なジョークで雰囲気を和らげてくれる、そんな気働きの秀でた得難い先輩でもありました。

昨年の10月、いつもの市内八橋の喫茶店で開かれた幹事会が《団長》出席の最後のお楽しみ会となりました。

それまでの例会には体調が思わしくない中、気丈にも小生の送迎に恐縮しつつ、喜んで出席してくださり、幹事の仲間との歓談を静かに慈しんでおりました。

小生は《団長》を「秋田におけるアマチュアリズムの実践家」として高く評価してきたし、それは今日でも変わることのない思いです。

10年以上前の木内音楽賞受賞の際の記念演奏では、奥さんのピアノ、お嬢さんと二人でフルートというファミリートリオで眩いほどの景色を演出し、会場のたくさんの仲間から拍手喝采を浴びたものでした。

《団長》と小生、共に「音楽に救いを求め、救われてきた者」同志。

彼はフルート奏者、地元オーケストラのリーダーとして、小生は一人の愚直な視聴者として確かな繋がりを認め合えた、と思っております。

彼の「広場」への熱心な関わり方を反芻する日々ですが、この奇妙なモーツァルト愛聴団体の終焉まで共に手をとり合えなかったことが、悔しくてなりません

（昨年は開設メンバー　の一人、チェロの堀井淳司氏に惜別したばかりなのに・・）。

《団長》得意のフルートで、モーツァルトよ、あなたがお母さんを失ったパリで作曲したあのハープとセッションした協奏曲（k,299）を聴きたかったなあ、と心底思っているこの頃です。

モォツァルト広場20周年記念コンサートリハーサルでの畠山氏（2016年７月24日）

◆

「モォツァルト広場」を開設して今年の12月５日で29年、来年は30年の節目を迎えることになります。

この間、地元の多くの先輩諸兄や日本を代表するピアニスト久元祐子さんはじめ優れた演奏家の皆さんにご指導とご支援をいただきながら、ひたすら愉しんで運営してまいりました。

誰よりも貪欲に「モーツァルトをなまで聴く喜び」を追い求めてきた年月でしたが、会員の高齢化は避けがたく、永久会員も十指を超える時代を迎えました。

こうした現実を踏まえ、この先の運営にも憂いの情抗しがたく、徐々にクロージングの在り方を考えるようになってきている昨今です。

本「会報」も次回で50号の大台に載り、創設30年ともども節目を感じさせる時節ですが、この先我が「人生の点滴」の如きモーツァルトに相談をさせてもらいながら、納得できる着地点を見出していこうと考えております。

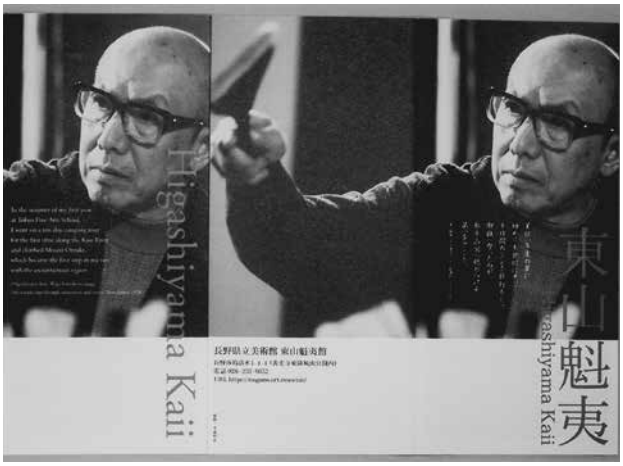
さわやかな夏風に揺らぎながら、ノスタルジックな連弾ピアノのアンダンテが再び密やかに耳元でささやきはじめました。

end

東山魁夷とモーツァルトの音楽（中）

会員番号　K.203　**松　田　至　弘**

東山魁夷がモーツァルトの音楽に心惹かれるようになった時期と動機は、明確なものではなく漠然としている。



東山魁夷（長野県立美術館　東山魁夷館のパンフレット・写真・寺島照夫）

だが、モーツァルト音楽との関係はある時から、突然深まることになった。そのきっかけとなったのが、いわゆる「光昏」（179.0×134.0センチ）の制作で、魁夷はそのエピソードを相当詳しく述べている。ここにその要点を記すと次のようになる。

魁夷は1955年、自宅の画室で、２，３年前に描いて放っておいたスケッチをもとに、秋の日展に出品する作品を制作しようとしていた。そのスケッチは、長野県の最北端にある野尻湖の秋景で、対岸に黒姫山がありそれらを眺めた構図であった。

ところがある時、何気なくそれを見ているうちに、突然違った風景が脳裏に浮かんだのである。「竪長の画面の空を金色に、黒姫山を逆光の紫金色にして、真黒な湖を近景の樹木の渋味のある紅葉で挟んだ」風景がそれであった。

魁夷はこの構想をもとに制作を続け、絵が完成に近づいたある日の夜ふけ、それを画室の壁に立てかけ、モーツァルトの「交響曲第41番ハ長調」（K.551.この曲は「ジュピター」という名で親しまれている）を聴いていたという。

すると、鳴り響く曲の完璧で壮大な音に自分の絵が圧倒され、ひどく物足りなさを感じ茫然とした。そして、部屋でモーツァルトと二人で向き合っている気持ちになり、その時ばかりはモーツァルトの音楽を恐ろしいと感じたというのだ。

その後も魁夷は、「交響曲第41番」を時々聴きながら画面を見つめいろいろ考え続けたが、モーツァルトの曲に刺激され、フォルムを大きくしたり色調の濃度を強めたりして重厚な作品に仕上げた。

この作品は、第11回日展に出品され高く評価され、次の年に新境地を開いた傑作として日本芸術院賞を受賞した。

＊

ところで、東山魁夷が千葉県市川市に、友人の建築家吉村順三設計による新居を建てたのは、1953年のことであった。続いて1955年９月には、二階の画室を増築している。画室は、ステレオ・レコードの音響再生装置を組み込めるようにした設計であった。

音楽界では間もなく、わが国最初のステレオ電蓄とステレオ・レコードが発売され、レコード愛好家の夢であった「ステレオ時代」が幕を開けることになるが、それを先取りした建築であった。

魁夷はそれまでも、モノラルのＬＰレコードを多く集めていたが、今度はステレオのＬＰレコードを収集し始め、レコード戸棚にステレオ盤がずらりと並ぶことになった。いろいろな作曲家のクラシック音楽レコードも集めたが、モーツァルトのものが圧倒的に多く、多様なジャンルに渡っていた。

これらのレコードを主にいつ聴いていたのかということは、大変興味のあることである。

すみ夫人を初め何人かの証言を集めてみると、魁夷が音楽を聴いたのは、夢中で集中して作品を制作している時ではなく制作の合間、塗った絵具を乾かす間、制作を終えた時、朝や就寝前などだったことがわかる。研究文献のなかには、東山魁夷はモーツァルトの音楽を「作品の制作時に好んで聴いていた」と書いているものもあるが、誤解を招きやすい表現と言えよう。

「光昏」の制作の時も、絵が完成に近づいた日の夜ふけ、ほっと一息入れた時に「ジュピター」を聴いたのであった。これは、おそらく増築した二階の画室での体験であろう。

演奏会もモーツァルトを聴きに行く機会が多くなっていった。初めの頃は指揮者や演奏家を選ぶことなく、モーツァルトの曲であればそれを聴くため、演奏会場に足を運んだのである。

1963年の９月に日生劇場が完成し、10月のこけら落としでベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団・合唱団の公演が行われたが、魁夷はチケットを取って駆けつけ、その時初めてモーツァルト・オペラの実演を観た。

初来日した巨匠カール・ベームが指揮した「フィガロの結婚」（Ｋ.492）がそれである。ベームは、モーツァルト作品の名指揮者として広く知られていた。

右はモーツァルトの「交響曲第41番」のレコード。左は東山魁夷が感動したカール・ベーム指揮のオペラ「フィガロの結婚」のスタジオ録音盤レコード（加藤仁氏提供）

その時の感動もあって、魁夷は大のオペラ好きになった。そして後年、最も好きなオペラ作品は「フィガロの結婚」だと語っている。

魁夷はいつも、モーツァルトの音楽を、心からの尊敬と親愛の情をもって聴いたが、「平明で清澄で、純粋で謙虚で、暗さも悲しみもすべて昇華され、常に新鮮で絶えず生動し、甘美で崇高で、譬えようもない美しい光彩に満ちた完璧な音楽」と讃辞を述べている。

また、モーツァルト晩年の三大交響曲を、「それぞれ趣を異にする充実した完成美を示す最高の傑作」と評価し、経済的にも精神的にも苦しい状況にあって、しかも短期間で一気にこのような不朽の名曲を生み出したことは、とて

も人間業とは思われないとし、「天才の才能は、それ自身で威力を発揮するものではなく、デモーニッシュ（魔的）な情熱と結びついて、初めて大きな力が生まれる」と考えた。

魁夷はゲーテの『ファウスト』を引き合いに出しつつ、このとらえがたいモーツァルトをデモーニッシュな天才、つまり「魔的な力」・「超人的な力」を発揮した天才作曲家ととらえたのである。

*

東山魁夷は1969年４月から９月にかけて、妻と共にドイツ・オーストリア旅行を行った。これは二人が長いこと望んでいた旅であった。そして、その中心をなしたのが、モーツァルトへの旅であったことは言うまでもない。

旅は、モーツァルトの生誕地で行われる音楽祭（ザルツブルク・フェストシュピール）に合わせて、周到に計画・準備されて行われた。その様子は「ザルツブルク」と「モーツァルトとの邂逅」のエッセイのなかに綴られている。

東山夫妻は、ザルツブルクの町とモーツァルトの関連史跡をくまなく巡り歩いた。また、帰国までの間に、念願だった演奏会に何回も出かけ、モーツァルトの曲を心ゆくまで楽しんだ。

ザルツブルクのミラベル庭園からの眺め　上中央はホーエンザルツブルク城塞

魁夷は、ザルツブルクがモーツァルトにとって、どれだけの意味を持ったのだろうかと自問し、次のように自答している。

「ザルツブルクに生まれたことは、モーツァルトの音楽にとって、決定的なものであると思われる。ザルツブルクの町、その歴史と性格、その地理的位置、建物のたたずまい、周辺の清燈な風景、すべてがモーツァルトの音楽を育てる土壌であり、養分になっているに違いない。」

モーツァルトが、当時の音楽的環境や主君の大司教との関係などからこの町を嫌い、ウィーンに定住したことはよく知られているが、にもかかわらず魁夷は、ザルツブルクの歴史的美の景観と自然環境の美、そして、両者の調和が、モーツァルトという作曲家の感性を鍛え、その音楽に宿命的な影響を与えていると考えたのである。

前に、魁夷がモーツァルトをデモーニッシュな天才ととらえたことを指摘したが、魁夷は旅を終えた後、「今度の旅を通じて強く印象づけられたことの一つは、このデモーニッシュという観念である」とし、その上でモーツァルトの場合、素朴さ（筆者＝素朴な人間愛や自然と調和する心性）があり、また、人間的な深い悲しみも経験しているので、魔的な力をよき方向に向け音楽の面で人類に奉仕することができたと断言した。「デモーニッシュなものと素朴さが、堅く結びついているのがモーツァルトの芸術と思われる」と結論づけている。

『もしもピアノが弾けたなら』

会員番号　K.375　**安　藤　正　昭**

Mozartをフランス語読みにして、モザール・マンドリンオーケストラという社会人演奏団体が大阪市にある。この合奏団は、かつての松下電器㈱のクラブから発展的に創設されて40年以上活動しており、2005年（pre-Mozart Year）には、ウィーン・コンツェルトハウスMozart-Saalで演奏会を行っている。

物部一郎作曲「ソナタ『阿波』」が兵庫県立芸術文化センターで初演されたのは、モザールの30回記念演奏会だった。この時の打ち上げ会で作曲者に、「秋田にも物部氏が居ります」と話したことがあった。物部氏・・と言えば、歴史の授業に出てきた飛鳥時代の、あの物部氏である。その子孫が宮司をしている協和町の唐松神社は、安産・子宝の神として、県内のみならず全国から、ご祈祷や御礼参りの参拝者が絶えることがない。

物部一郎氏が1972年（昭和57年）に出版した『15のピアノ曲集』は、多くのピアノ演奏者から懇望され、これに80代で作曲した６曲を加えて、一昨年（2021年６月）『白黒クジャクと思い出の歌』として出版された。このピアノ曲集とＣＤをご恵贈あずかり、初めて聴いたのであるが、星の夜だったり、花の草原を蝶が舞い、夕凪の波風を偲ばせる、それは、なんとも優しく叙情的で、色々な懐かしい想いを呼び覚まし、新型コロナ禍中の気持ちをホンワカとさせてくれた。

これまでに氏から送られて来ている多くのピアノ楽譜は、「猫に小判」みたいなもので、どんな曲なのか全く知らずにいた。『子供のためのピアノ曲集』、「トーク音楽『大きなアリと小さなゾウ』」、「長詩トーク音楽『がっこのおばん』」、「尺八と箏のための『竹・絃バラード』」、『花とピアノ１、II、』、『花とピアノIII（四季花曲集）』、「竹絃群音曲集『コラール・ファミリーズ』」、「バガデル『発想ピアノ』」、「鳥取トーク民話『絵姿女房』」、「ファミリー・アンサンブル『星の夢』セレナード」、「ピアノによる『Birds Watching』」、「群奏曲『音階マンボ』」等々、他にもまだある。高齢なんて言ったら叱られると思うが、氏の感性と創作意欲は衰えることを知らない。最新（５月）の楽譜は「鳥取民話トーク『七夕女房』」、という具合に。

これらの楽譜をピアノ教室の先生、箏の師範、保育園にも紹介しているが、手元には、物部氏の楽譜がどんどん積み重ねって増えていく。

あぁ！「もしも、ピアノが弾けたなら」！

亡妻に触れるがごとく、遺品のピアノを弾いてみたい（^_-）♪♬！

ロマン趣味探訪

会員番号　K.332　**片　岡　　元**

●頓挫するモノ整理

ある日家人と実家の整理をしていると、昭和初期のレコード目録が３部と小型のスコアブックが１冊出てきた。

内容は､｢コロムビア洋楽レコード総目録｣｢ポリドールレコード洋楽総目録｣｢ビクター洋楽レコード｣と、ＳＰレコードの付録と思われるベートーヴェンの「運命」の小型スコアブックである。全て発行が、1937年＝昭和12年、日中戦争突入の翌年のものである。

古さも内容も著しく私の興味を引いたので、家人の目を気にしながら整理の手を止めて、とりあえず「目録」をめくってみた。

各ページは罫線で整理されたＳＰレコードカタログで、演奏者、交響楽団などが羅列されている。

まずクラシックの作曲家の総数は、活字が非常に細かくてジャンルも洋楽まで含むためまとめにくいが３部合わせて50人くらいであろうか。

モーツアルトの楽曲については、当時は現在ほどの「シェア」を占めていなかったようで、それほど多いとは感じられず、室内楽、ピアノソナタ(奏鳴曲)、協奏曲などに数曲認められる程度である。

モーツアルトデータ

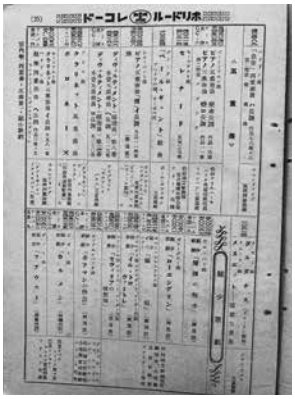
紙面上とても網羅はできないが、今回の演奏プログラムにあるクラリネット五重奏曲イ長調K.581では、ドライスバッハ教授（クラリネット）＆ウエンドリング弦楽四重奏団と、チャールズ・ドウレーパー（クラリネット）＆レナー弦楽四重奏団の記載があった。

他に少し例を挙げると、弦楽四重奏曲ハ長調K.465 デマン弦楽四重奏団、ピアノ奏鳴曲イ長調 K.331土耳古（トルコ）行進曲奏鳴曲 ル

レコード目録

スコア扉ページ

スコアの一部



K581

ドルフ・ケンプ、アダージョ（ヴァイオリンとオーケストラのための）ホ長調 K.261 ゲオルグ・クーレンカンプなどである。

他のモーツアルト演奏については、著名な名前のみ紹介させていただきたい。

リリー・クラウス、シモン・ゴールドベルク、ヨーゼフ・シゲテイ、エリー・ナイ、ウイレム・メンゲルベルク、ブルーノ・ワルター、ウイルヘルム・フルトヴェングラー、トマス・ビーチャム、ヘルマン・アーベントロートなど。

●高齢化とロマン趣味

筆者は常々、昨今の若手から中堅クラシック演奏家の演奏は、総じて水準が高く、速い部分でも破綻せずとても気持ちの良いものが多いと感じている。

しかしながら自ら高齢であるせいか、どちらかというと「演奏家の個性的な表現を感じられたら面白いのに」と思うことがある。

このような思いに囚われているところに、前述の1937年版レコード情報の出来は、実に嬉しいことであった。

なぜかというと、レコードが欧米を中心にＳＰからＬＰに変わって普及していくのは1948年頃であるが、このカタログ時代の演奏家は19世紀生まれが多く、充分ロマン主義の流れを尊重しているはずである。

文学にも西洋音楽にもなくてはならないロマン主義。少し古いが「ナマ」の資料を手にして、西欧のクラシックが、いつから感情移入を抑えた様な画一性を持ってしまったのか、という部分を自分なりに掘り下げたい気持ちが強くなったのである。

●どこまでがモーツアルト？

このテーマは『どこまでがドビュッシー？』（青柳いづみこ著）から使わさせていただいた。この本では、演奏家の行き過ぎたロマン主義的な表現が、音楽界の中で修正された時期があって、（恐ろしいことに）演奏は「楽譜ありき」の考え方に徹し始めたと言うもの。

この流れの発端は「ノイエ・ザッハリヒカイト＝新即物主義」という美術用語からきていて、時代は1920年過ぎから起こった芸術運動からとしている。

そのため感情移入たっぷりの演奏は「古い」ものとして「業界」から締め出しを食らい、一方では早いパッセージを確実に演奏するが、個人が加えるポルタメントや強いリタルダンド、フェルマータの過大な表現などが抑えられた音楽が底流となって今になっている－と解釈できるかと思う。

数年前に、モーツアルトのピアノ演奏において、「静謐に」「清廉に」表現をする演奏家がとても称賛されるような時代があった。驚いたことに、ほとんどの推薦盤が同一の演奏家だったりする。

あまりにも演奏家や批評家が没個性的であると「それでもモーツアルト？」と言いたくなる。

勝手な内容の前置きが長くなってしまったが、では「どこまでがモーツアルト？」か。

今般の目録に、アダージョホ長調 K.261 を演奏したクーレンカンプの記載があった。

ゲオルグ・クーレンカンプ（1898年－1948年）は当時活躍したドイツ、ブレーメン出身のヴァイオリニストで、今日はベートーヴェンやシューベルトなどのＣＤ数十枚が販売されている。

現在筆者は残念ながらこのK.261を含むＣＤを未だ見つけられずにいるが、調べてみると彼は、ロマン派的演奏を継承していたらしく、同時代の演奏家を結構痛烈に批判している。

『われわれの時代の、いわゆる機械運動的・即物的な演奏スタイルは、リズムおよび響きという点での質の向上を証明するものではなく、むしろ、拍子をきざんだ進行とデュナーミッシュな内的緊張とが同時に金しばりになって機械的な働きをするようになった結果、ファンタジーが衰弱したことを物語るのである。』その絶妙な表現も相まって印象的なものでないだろうか。

話は現代に飛んでしまうが、実演の中でこれを払拭してくれたのが、1990年代に大仙市にて奇跡的に演奏された、E.ハイドシェックの演奏会におけるK.332のソナタであった。氏の演奏は誇張が多く評価の別れるところであるが、コルトーの弟子、さすがにフレーズの要所にモーツアルトの予測できない音楽が満ちていて、素晴らしいの一言であった。そして同氏の有名な宇和島盤ＣＤで再度聴くたびに新しい気持ちになる。このような演奏が筆者にとっての愛聴盤となるのである。

類まれな作曲家であるから、静謐すぎても、感情移入が過ぎても「どこまでもモーツアルト」になり得るといえばそれまでだが。

●当時のライナーノーツの水準

冒頭の、昭和12年に発行されたウイレム・メンゲルベルク指揮ベートーヴェンの「運命」のＳＰ（日本テレフンケン）に付属していたと思われるフルスコアの中からも注目のポイントが見つかった。

それは、そのスコアブックにあるベートーヴェンの解説が、簡素なものであるけれど、基本的な要点は現代のライナーノーツとほぼ同じ水準になっていたことである。

つまり、ベートーヴェンの音楽鑑賞に必要な基本要素は、当然のことながら西欧では19世紀にほぼ確立していたと思うが、それが昭和初期に日本のクラシック愛好家に広く浸透されていたということである。

筆者はメンゲルベルクのＣＤはバッハとチャイコフスキーなどを数枚持っているだけであるが、十分個性ある名演と感じている。

今後の楽しみは、メンゲルベルクの「運命」や、クーレンカンプの音源をいつか手に入れて、じっくりと聴いてみることである。

そこには例え音質がまあまあであっても、伝え忘れ去られた感情のフレーズをいくつか感じとれそうな気がするからである。

●探訪が妨げるモノ整理

私のクラシック音楽鑑賞は、今のところ、和洋含めたライナーノーツなどから得た情報で歴史的録音のＣＤを選別し、演奏家と共演者の情報を結びつける、芋づる式の楽しみを持つようになってきた。

そのための情報がある古い紙類は、家人には

ゴミでも私にはまだ何かを見出す大切な栞のようなものである。

しかし、学生時代に少ない予算で足を運んだ演奏会等の、チケットやパンフなどを捨てることができない優柔な性格が、すなわち実家の「断捨離」を色々曖昧な理由で中断させてしまい、家人との争いごとの絶えない日々を増やすはめになっているのである。

酒とモツの日々（49）

会員番号　K.488　**佐　藤　　滋**

モォツアルト広場第24回サマーコンサート開催おめでとうございます。
もうそろそろ・・・いやまだまだ・・・の声の中、加藤代表も思い悩んでいることでしょう。いつまで、この会を続けたものかと。

シューベルトの未完成交響曲を聴く度に思うのは、なぜ未完成で終わってしまったのか、ということ。行き詰まり説、忘れた説、あるいは恋の思い出説（映画にもなりました）等いろんな説があります。でも長年この曲を聴いて思うのはシューベルトは「永遠の未完成」を完成と捉えて『これで良し』としたのではないか。

「ネバーエンディングストーリー」を書いたミヒャエル・エンデ（「モモ」が有名）という童話作家がいます。東の巨人が宮澤賢治（今年没後90年）なら、西の巨人はこの人でしょう。エンデを紹介する文章を読むと、「世界を否定的に捉えて警句を発する絶望的な知識人に対し、人生を楽しみ創造の喜びとともに生きる人がいる。エンデはまさしく後者の人であった」（ミヒャエル・エンデが教えてくれたこと）とあります。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない、とした宮澤賢治が前者なら、アンネ・フランクと同年に生まれたドイツ人として、レジスタンス活動に従事し、恐怖に晒されながらも希望に満ちた童話を書き綴ったエンデは後者の代表と言えます。（作曲家で言えば前者がマーラー、後者はモーツァルト！）

モーツァルトはよく、明るくて上品で、悩みの無い人、と思われがちな作曲家です。でも彼の手紙にはふざけた文章や、下品な表現の中に、時折胸に迫る悲痛な心の葛藤が見える場合があります。曲は途中で転調した方がサビが生きる、と言われます。彼の音楽はほとんどが明るい性格ですが、途中で一時的に短調に転じます。そのことが、より明るさへの愛おしさを際立たせるのです。これが表現者としてのミヒャエル・エンデとモーツァルトが通じるところなのかもしれません。

モーツァルトの絶筆はレクイエムですが、未完成の曲です。彼は未練を残して死んだのか、それともシューベルトのように『これで良し』としたのか。我々庶民の場合でも、前者タイプの人ならば「あれをやれば良かった」「これが終わっていない」と煩悶しながら、永遠に人生

は未完成で終わるのかもしれません。でも視点を変えて、やったこと、出来たことを振り返って味わうのも、素敵な人生の完成と言えるでしょう。「あの景色は素晴らしかった」「あの時は楽しかった」「あの人と出会えて良かった」等、人生の輝きとは、ゆとり時間の使い方のなかにあるのかもしれません。

モーツァルトのレクイエムを聴く度に思うのは、素晴らしい完成作だということです。途中まで書いて力尽きたとき、彼はやるだけやって『これで良し』と思って後を弟子に任せたのではないでしょうか。　弟子のジュスマイヤーは立派に曲を完成させました。（この補作に対して、いまだに批判はありますが、誰もこれ以上の補作を出せません）

さて、モォツアルト広場にも長い物語があります。が、決して「ネバーエンディングストーリー」にはなれません。どこかで「永訣の朝」は必要です。やり残したことはたくさん。けれども、ゆとりが無くなってゆく現代に「生でモーツァルトを聴こう！」という「楽しいゆとり時間」を提供し続けた活動は、歴史に残るでしょう。（エンデ作の「モモ」では、時間泥棒たちが人々の「ゆとり時間」を盗んだ為、効率優先の恐怖社会が出現します。）モォツアルト広場も素晴らしい記憶を積み重ね、いつでも『これで良し』と言えるようになったのではありませんか？我々会員も、曲がった鉄砲玉みたいに加藤代表のつぶやきを楽しんだのですよ。

「ＡＭＵＳＥ とてちてけんじゃ」って。

事務局より

編集後記では個人的な話題ばかりをお伝えしておりますが。十数年ぶりに吹奏楽コンクールに出場する機会があり、初めて『あきた芸術劇場ミルハス』でコンクールの舞台に立ちます（サマーコンサートの翌日）。あの広い舞台ではどんな緊張感があった、どのような音が出て、どのような響きになり、ホール全体にどう届くのか？未知の世界。秋田県民会館や秋田市文化会館での演奏機会（思い出）もたくさんありますが、ミルハスというステージに変わりこれからも自分自身や子どもたちのたくさんの思い出が作られていくことでしょう。これも楽器を長く続けているひとつの褒美なのかなと自分に言い聞かせて12分間を存分に楽しんできたいと思います。

もう一つ。この春に高校に進学した息子は中学までトランペットを吹いていました。ところが高校からトロンボーンに転向、まさか同じ楽器になるとは。また楽しみが一つ増えました。これも長く続けていたご褒美なのかな。　（K575）